

レバノンでのシリア人灌漑技術者向け研修に参画して

シリア国は、国際耕種にとって、とりわけ深く長い関わりと思い入れのある国である。同国は、度々の長期専門家派遣や初めて国際耕種が主管した技術協力プロジェクトの実施国であった。そのシリアは、2011 年 3 月から内戦状態が続く中で、主だった経済・社会インフラが破壊され数百万人規模の国内避難民及び国外難民を生むなど悲惨な状況に置かれている。そのような悲惨な内戦状態にもやっと明るい兆しが見えてきた 2019 年 10 月、FAO/ICARDA を実施機関とした“Efficient irrigation techniques and rainwater harvesting”研修コースが実施されることになった。レバノン国（ベッカー高原にある ICARDA 施設周辺）で行われた講義・実習には、国際耕種から先のシリア国灌漑農業普及計画プロジェクト（DEITEX）にも深く係った湖東と松島が参加する機会を得た。

研修前半は、ICARDA 研究者らによる効率的な水利用や Water harvest 等に関するセオリーや知識の講義が中心に組み、後半は国際耕種及びシリア人 C/P（DEITEX メンバー）による灌漑システムの設計、機能診断技術、農家調査法、応急対策技術（First aid solution）の講義・演習が充てられた。また最終日には、本研修で学んだことを今後の業務に活用していくための個別計画作りを行った。この研修工程は、各研修員が本研修から得た“Useful Learning”の抽出を第一段階とし、それらの活用方向の絞り込みを第二段階、さらに第三段階として農家が直面する諸問題の想定とその解決のために必要な普及活動行事の企画などを行い、各自が今後実行していくべき個別アクションプラン（AP）を策定した。AP 策定当日には、レバノン国内で大規模な反政府デモが発生し、研修員間の

議論が尽くせなかったなどの不測事態もあったが、ほぼ予定通りの研修を行うことができた。

研修員の談によれば、現状のシリアは、各農家所有の井戸水源灌漑システムもその多くが破壊され、修理・交換部品の不足などで放置されたままとなっている。また、井戸ポンプ燃料も、内戦勃発前の 10 倍以上に高騰して入手困難な状況にある。研修参加者作の AP の多くは、灌漑システムのメンテナンスや施設の First aid 対応に焦点が当てられていた。現状に関する彼らからの情報と照らし合わせても、現時点で手の届く臨機応変な手立てで既存灌漑システムの復活を図ろうとするシリア人技術者の意欲が感じ取れるものであった。技術者研修における研修カリキュラムは、受講者の現場ニーズに基づくべきであろうが、得てして講師サイドの都合などが優先されることもあり、残念な思いをすることが多い。特に今回のシリア支援のような緊急時の研修においては、研修員の能力や状況に応じた即応的で柔軟な講師側の対応が重要であると痛感させられた。

今回の研修では、幸いにも旧 DEITEX プロジェクト C/P らと 8 年ぶりの再会を果たし、お互い抱き合って喜びあった。彼ら C/P とは長く交流が途絶えていたのに、まったく昨日別れたばかりのようなスムーズな連繋作業が実現できた。C/P らの能力の高さは云うまでもないが、同プロジェクトで培った連帯感が如何なる状況であっても持続していることに、改めて感動を禁じ得ない我々であった。



DEITEX C/P らとの協働作業風景